

---

# 魔法少女リリカルなのは～銀髪の少年～

竜胆 霧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 銀髪の少年

### 【Nコード】

N1636X

### 【作者名】

竜胆 霧

### 【あらすじ】

恋姫が予想以上に書けないので魔法少女リリカルなのはに逃げます。こんな作者を許してちょんまげ（今殺意を覚えた方は正常な人です。恋姫書け無い時に更新予定 元ネタ：リリカルなのは、劇場版、A's、ストライカーズ（予定）

第1話 喪失・出会い（前書き）

恋姫思い浮かぶのに腕が動かん……動かん！

なので腕が動くリリカルなのはを書く！

逃げ上等

読者にごめんなさい

## 第1話 喪失・出会い

落ちてからどれほど……

どれほど経ったのだろうか……

時間という概念が存在しないこの空間に唐突に投げ出され、今できることと言えば思考することのみ。

さっき、それともずっと昔のことかわからない。

けれど俺は幸せを謳歌していたのは確かだ。

なぜ？　なんで？　どうしてこうなっているのか？

自分自身に問い、心を、記憶を覗き込む。

逆再生される記憶が、その時の心が俺の中を暴れまわる。

ギョツと握る掌に何かを掴んでいると気づいたのはもっとも新しい記憶を見たから

これは両親からの贈り物。

研究者たる両親がこれを渡してくれた日……そう、その日に俺は…

……

ネム・アースベルグと書かれているネームプレートをぶら下げ、いつもの様に研究所へと入っていく

「お、我らがネム博士が来たぞー」

俺を目ざとく見つけた一人の研究者が声を上げるとそばにいた研究者たちが一齐にこちらを見てニヤニヤし始めた。

大方予想はつくものの、相手にしたくないと心の底から思っているのであえて無視して進んでいくものの、皆少しばかり頬を赤くしている俺を見るたびニヤニヤしているのが分かる。

「何笑ってるんだよ……まったく」

そう言いつつもやっと出来上がったアレを試せると思つと胸が高鳴り思わず自分もニヤニヤしてしまいそうになる。

自慢ではないが俺の魔力は測定不能で普通のデバイスではすぐに壊れてしまう。

だからデバイスや携帯転移装置など手がけている両親の元で物覚え

ついた頃からデバイスについてあれこれ勉強をしている。

そんなこんなで両親と共に研究研究研究に勤しんできたわけだけれど俺の考え出した統一分割理論と両親の知恵と技術によってやっと俺専用のデバイスが出来た。

まあ、このデバイスの事は結構極秘というかなんというか……

私語となので上役には全く説明していない。研究者は知らないうちに皆知っていて、俺を小さい博士だとか色々言ってくるのだが

正直恥ずかしすぎて困る。俺は小学三年生にしては知識があるというだけで俺よりずっと知識と経験を持っている皆から博士と呼ばれるのには若干の抵抗がある。

そんなのを見越して俺の恥ずかしがる姿などを見たくて呼んでいるあたり、皆娯楽に飢えているのかもしれない。

まったく、同じ建物内にある駆動炉の実験チームは上役に実験予定を今日に早められて大変だったのにこいつらは……

そう思いながら建物内の奥の両親のスペースへと足を速める。

たどり着くと同時に扉が左右に開き、中の様子が見えるようになる。

そこに机に俯せに眠っている人が一人と、その寝顔をコーヒーを飲みながらじっと眺めている人物が一人。

「母さん眠ったのか……」

「さすがに出来る目途がつくと後は楽しみで徹夜なんてわけないんだが、終わるとやっぱりぶっ倒れるんだよなこれが」

そう言っつて俺を見た父さんが微笑みながら母さんから離れケースを俺の前へと持ってくる。

「これがお前のデバイスだ」

ゴクリ…と生唾を飲み込んで俺はケースへと手を付ける。

ケースを開けるとそこには四つの装飾があった。

二つは腕輪であり、その中の一つに青と黄色の球が埋め込まれ、もう一つは赤と緑の球が埋め込まれている。

一つはネックレスであり、純白の球がぶら下げている。

一つは髪留め、真っ黒な色で統一されたゴム素材と球のついた物だった。

「能力は？」

一つ一つ手に取りながら聞いてみる。

「教えない」

「え？」

俺がデバイスから目を離し、父へと顔を向ける。

「自分で一つ一つ確認したほうが楽しいと思うぞ?。」

そういつて最高の笑みを俺へと向けた後再度母の方へと向かう。

「それと、まず名前を付けて契約してやれ」

「ん、それもそうか…」

なんだか微妙な親切? をされた後、至極まっとうな事を言われたのでとりあえず契約をする為、デバイスを身に着ける。

両親譲りの銀の長髪を縛り、右に青黄の腕輪を、左に赤緑の腕輪を、最後にネックレスをかけて両手を突出し、唱える。

「風は空に」

ゆっくりと魔方陣が己の足元に浮かび上がる

「星は天に」

魔方陣から光の粒があふれ、各々の分割されたデバイスへと集まっ  
ていく

「不屈の心はこの胸に」

魔方陣の周りを風が走り抜けていく

「この手に魔法を!」



最後に光が溢れたると同時に名前を叫ぶ

「エンペラー Set Up!!」

「Stand By Ready set up」

機械的な男の声が答えると同時に光のドームが広がっていく。その中にポツンと残った俺はエンペラーと対峙する。

「お初にお目にかかる。我が新しき主よ」

普通のデバイスと違い両親が色々いじっている様だ。普通はテンプレな受け答えが帰ってくるものだが……遊び心満載過ぎるよ

「よろしく……というか名前と言動が合致しないな」

「仕様なので諦めてくれ主」

無機質な声が答える……確かに仕方ないかもしれない。

「主の魔力資質を確認したが、我をもつてしても壊れかねないので扱いには注意してください」

「それと分割されているデバイス・防護服ともに、各々の最適な形状を自動選択で選択するがよろしいか？」

「ああ、ついでに各々の組み合わせた場合のも登録しておいてくれ」

「わかり申した」

エンペラーが答え沈黙する。恐らく登録に時間がかかっているのだらう。

「とりあえず登録出来たら今日はそれでいいや」

正直試したい気持ちもあるがここは研究施設で周りの迷惑にもなるだらう。というより一瞬とはいえ先ほどの光でだいぶ迷惑をかけたはずだからこれ以上は困る。

エンペラーの了解という返答を聞いた後、お礼を言う為に父の所へ振り向くと…そこには父がすごい形相で俺を睨み付け何かを投げつけた。

いや、正確には俺の後ろの何かを睨み付けていた。

俺に父が投げた物体が当たると同時に俺は飛ばされたいた。

父が投げたあれは恐らく携帯型転移装置の試作品……

そしてここは転移に失敗した為飛ばされた何処かの空間。

その中をひたすらに落ち続けているのだ。

もしかしたら此処は虚数空間なのかもしれない…

だって魔法も使えないし落ちてるし。

でも何故父がいきなり携帯型転移装置を投げたのか理解が出来ない。

あれはまだまだ実用段階ではないし、人に使つていいものではない……だがそれを使つたとなると俺の後ろで何かが居た、もしくは起こつていたのは確実だろう。

俺の後ろに特に何かいた様な気はしない……となると俺の後ろは確か駆動炉の実験場。

まさか……暴走したのか？

もしそうだったとしたらもう俺の両親は……

唐突過ぎる、理解が追いつかない、なぜ？

どうして？

そんな疑問を己にぶつけながら俺はひたすらに落ちて行った。



もあるのだ。

このままじゃ俺の……両親の努力が報われない。

まだきちんと試してもいないんだ。試さなきゃいけないんだ！ 研究者として、息子として……

何でもいい、時空管理局だろうが悪の組織だろうが神様だろうが悪魔だろうが

何でもいいから俺を助けてくれ！

言葉にならない言葉を発し続け、俺はずっと叫び、落ち続けて行った。

叫び続けてどれぐらいたっただろうか……

いつまでも変わらない落ち続けている状況に加え、遂には声も枯れ果てている。そんな状況に俺は絶望していた。

もう諦めよう、もうだめだ、いつそ殺してくれ。そんな思いが俺の心に去来し始めたその時、眩いばかりの光に包まれた。

その光は語りかけていた。

か細く、弱弱しい声なのに一語一句逃さず聞こえてくる。

どこか温かく、悲しみをたたえている様な声

「アリ……シア？」

俺はそいつの頼みと名前を聞き終えると同時に意識を失った。

目が覚めるとそこには森が広がっていた。

ここは何処だ？

そう思い見回してみると目の前に三人の女の子が立って目を丸くしていた。

「「「「……………」」」」

空気が凍ったというのはいくらいうことを意味しているのかもしれない。

「あ、あの……………」

沈黙を破ったのは茶髪のツインテールの女の子だった。

「なんですか？」

「ちょっと！ 一体どうやって現れたのよ？」

茶髪の女の子を追うように金髪ロングの女の子が疑問をストレートにぶつけてくる。

「アリスちゃん、そんなに強く言ったらだめだよ」

紫の女の子がそれを宥めにかかる。

見た目から判断するにこの女の子たちは俺とさほど年が離れていないように感じる。

この年でデバイスを持っていないあたり、ここはミッドチルダではないのだろう。

「ここはどこ？」

俺の言葉を聞いた少女達は一瞬固まり、顔を見合わせた後、少しばかり離れこそこそと話し合いを始めてしまった。

しばらくして話し合いが終わった三人は俺の元へと戻って来た。

「えっと、君……もしかして記憶喪失？」

茶髪の子が三人を代表して話しかけてきた。

「違う」

俺は考えるまでもなく即座に否定する。これまで生きてきた中で忘れた記憶など微々たるものだ。

「じゃあ名前言ってみなさいよ」

金髪の子はなぜか少し攻撃的な口調で話しかけてくる。もしかしたら警戒しているのかもしれない。

この三人の中じゃ一番気が強いというべきかもしれないが……

そんなことを考えつつも回答することは忘れない。

「ネム・アースベルグ」

「ネム君っていうの？」

ああ、と返答をしようと思ったのだが急激に視界がぼやけていき、口が動かなくなっていた。

もしかしたら限界かもと思うと同時に俺はまた意識を手放した。



「あ！」

気づいた時にはネム君の体は既に傾いていた。

とっさに抱き留めた時、女の事は違う若干気肉質で固い感触で気づいた。

(この子男の子だったんだ……)

すずかちゃんとアリサちゃんが心配そうにネム君を覗いている。

でも、困った。こういうのってどうしたらいいんだろう？

そう思いネムの状態を確認しようと顔を覗き込む。

顔が青くなっていたら救急車呼んだ方がいいよね、そんなことを思いながら覗いてたはずなのにいつの間にか綺麗な銀髪と整った顔に目が行っていた。

「なのは、どうかしたの？」

アリサちゃんの声ではっと我に返って自分のしてた事に気づいた。

「えと、あつと…、その、なんでもない！」

とっさの言い訳が思い浮かばず適当に誤魔化して俯く。

「救急車…呼んだ方がいいのかな？」

すずかちゃんの言葉に賛同する様に首を上下に動かす。

「そっかそれじゃ連絡するね」

そういつてアリサちゃんが携帯を取り出した時、影が差した。

「あれ？ なのはじゃないか。どうしたんだ、こんなところで？」

そこに立っていたのは高町恭也、私のお兄ちゃんだった。

「お兄ちゃん！」

救急車を呼ぼうとしていたアリサは手を止め、恭也を見て会釈する。

「…………その子は？」

お兄ちゃんがネム君を言っているのはすぐに分かったのでとりあえず事情を二人で説明する。

「なるほど」

そう言ってお兄ちゃんは考えるそぶりを見せると、ネム君を一瞥してこういった。

「うちに連れて行こう」

突然の事に混乱したのと同時になんだか嬉しくなった私が恥ずかしくかった。

すずかちゃんとアリサちゃんに了承をとって私はお兄ちゃんと一緒に帰って母さんたちと話し合った。

それからネム君は医者を呼んで診てもらい、過労で倒れたのだろうという診断を受け、起きてもしばらくは安静にした方がいいのとのことだった。

ネム君がまる一日眠っている間に母さんと父さんは警察に行き、捜索願が出ていないか確認を取って、出ていないと知ると養子にしようと言いだした。

家族の誰も反対しなかったのは恐らく記憶喪失かもしれないという私の説明のせいだ。

養子にするにはしばらく手続きなどで時間がかかるという事と、ネム君の意見を聞くという事でとりあえず今は起きるまで待とうという事になっている。

そして私は何だか気になってネム君の眠る部屋へに来ていた。

綺麗な髪と顔はもちろん見た限り体もひよろつとしていて初めて見

たときは本当に女の子だと思った。

ちゃんまげにしている髪はなんだか可愛らしいし、装飾品がより女の子らしさを引き立てている気がする。

でも実際触れてみるとちゃんと筋肉もついているし、女の子よりも固い。

そんなことを考えている自分に気づき、なのははしばらくネムの部屋で一人うんうん唸っていた。

実はその後お姉ちゃんにみつかってなのは存分にいじられたことは高町家の秘密である。

## 第1話 喪失・出会い（後書き）

最初はプロローグから始めようかと思ったけどプロローグっぽくないので1話からスタート！

どうでしょ？

正直1話しかないからわからんよね

次に期待ってことでb

リリカルなのはのハーレムってなのはに全て奪われちゃいそうだから難しいね。

## 第2話 新しい家族・友達（前書き）

どうも、恋姫ど同時進行で書いているんですが

やっぱりリリカルなのはの方が今は筆がのりますね。

そろそろ戦闘シーン入れたいなーと思っていたり

恋姫もちろん続けて書いていくのあまり心配しないでくださいな。

でわ続きをどうぞー

## 第2話 新しい家族・友達

賑やかな声で起こされるといっつのは思ったより新鮮だなとぼんやりした頭で考える。

しばらく周りを見渡し、自分の部屋ではない…何処か質素な佇まいをした部屋にいることに気が付いた。

とりあえずなんでこんな所にいるかはわからないが、あの落ち続ける空間からは出られたらしい。

どうして出られたのか？ なんて疑問は思い浮かばない、恐らくあの光の子が助けてくれたのだ。

それならあの子の願いを叶えないといけないと思いつつも、何も把握できていないこの状況でどうすることもできない。

一体全体どうしたらいいのやら……。

倒れる前の記憶だと三人の女の子がいたはずだけど、ここはあの子達の中の誰かの家なのだろうか？

それにしても賑やかな家だと思う。未だに賑やかな声が聞こえてくるあたり本当にそう思う。

俺の家では両親は研究三昧だし、どちらかと言えば家には音がない。まあ、俺も両親の研究所に行っていたので研究所の方が家と呼べたかもしれない。

といつても顔を突き合わせて話すのは研究に詰まった時や意見を聞きたい時、唯一家族らしい会話をするのは食事時のみである。

学校でもずっとデバイスを弄っていたので友達と呼べる奴もそれほどいなかったと思う、というか物好きな女が後をついてきていた気もするが、それもずっと黙ってだったから賑やかとは言えない。

賑やかなのは研究所の研究員たちだけだったかな……

それにしても、なんだか不思議な気分だ。

両親を失って、居場所を失って、残ったものはデバイスと己の身ひとつだというのに……

こうして事件を起こした誰かに憎しみを感じずに過去を振る帰ることが出来るなんて

もしかしたらあの光の女の子が、俺を逃がす時に持ち去ってしまったのかもしれない。それともまだ俺は現実を受け入れられてないのかもしれない。

自分でもどちらかわからないが前者であってほしいと思う。

そんな思いを巡らせているとノックと共に扉が少し開き、そこから茶髪の女の子が何の迷いもなく入ってきて俺の顔を見て立ち止まった。

「泣いてるの？」

少し心配そうな顔をしながらそう聞いてきた女の子の言葉を聞いて、



俺は自分が泣いていることに気が付いた。

慌てて涙を拭うものの時すでに遅し、心配そうな顔をずっと向けられてるのはなんだか居心地が悪い…………

「大丈夫、ちよつと目にゴミが入っただけだから」

思いつきり子供だましではあるけれど納得させるだけの言い訳も用意できない。

「そつか、なら良かった……。あ、そうだ！ 私なのはって言います。高町なのは」

そういつてとびきりの笑顔を見せてくれる女の子。

こんな説明で納得するの！？ なんて思ったのは当然だと思っ、けれどその純真さに驚き感心し続けているわけにもいかない。

「俺はネム・アースベルグ。助けてくれてありがとう、…なのは」

そう言つて感謝の意を表すと同時にこちらからも笑顔を見せる。

自分で完ぺきだと思えるほどの余所行きの笑顔だったと思うのだが、なんだか女の子が顔を赤くしたまま動かなくなってしまった。

もしかして怒らせてしまったのだろうか？ 何かまずいことをしたのかもしれないが、これと違って原因が思い浮かばない…………。

「えっと、今何か失礼なことしちゃったかな？」

いくら考えても思いつきそうにもないので聞いてみたのだが、その声に反応して女の子がワタワタと慌てはじめたかと思うと

「え！ いや、なんでもないよ」

と若干顔を赤くしながら首を左右に振りながら言ってきた。

そこまで否定されると逆に怪しくなってしまう。小学三年生とはいえ、日ごろから大人たちに混ざって生活していたのだ。

相手の心情を察するのなんて俺にはお手の物だ、なんて言えたらいいのに。

そんなことをぐだぐだと考えているうちに女の子はアクティブに腕をつかんだかと思うと

「そんな事よりネム君に話したいことがあるの」

そう言っただけ扉の向こう側へと俺を引っ張っていく。

廊下をしばらく進んでいくと少しばかり広いリビングに行き着く。そこにはなのはの両親や兄弟と思われる人たちが談笑していた。

ここが賑やかだった声の発生源だったらしい。

「おや、起きたのかい？」

これはなのはの親父さんだろうか？ なのはとは似ても似つかぬ黒い髪に優しげな顔たちをした落ち着いた雰囲気を漂わせている。

研究所にはいなかったタイプの大人だ。

「改めてみると可愛い女の子ね」

可愛い女の子？ 良くわからない発言をしたのはなのはの母親かな？ 朝日に映える茶髪におっとりとした雰囲気、ご主人に負けず劣らず優しい顔をしている。

「男です」

ここで改めて見てと言っているのは恐らく俺の事だろうからきちん  
と訂正しておく。なんで女の子に見えたのかわからないが、ちよ  
つと抜けている人なのかもしれない。

「……え？」「……」

なぜだろうか、リビングにいるなのはファミリー全員に疑いのまな  
ざしを向けられている。

「ちよつと凛々しい顔はしてるかなとは思っただけど……」

一瞬で納得顔になって何か呟きだしたのはお兄さんだろうか？ 親  
父さん似の黒髪に優しさの中に凛々しさがある顔だちをしている。  
筋肉質なのはなにか運動しているのだろう。

「はー、こんな顔した男の子っているのね」

お兄さんに続いて感心しながら呟くのはどこか幼さ残った顔立ちで  
眼鏡をかけている女の人。これは恐らくお姉さんだろう。

長い黒髪を結んでポニーテールにしている、サイドの髪を垂らしている髪型はどこか活発な雰囲気をかもしだしている。

「えっと紹介するね。こっちがお父さんの高町士郎で隣がお母さんの……」

有難いことに一人一人丁寧に紹介してくれる。

お父さんの高町士郎さんは駅前の喫茶店『翠屋』のマスターで一家の大黒柱。『御神真刀流』という名の剣術を習得しているらしいが今は妻を愛すことで精一杯だそうだ。

お母さんの高町桃子さんは料理上手で『翠屋』のお菓子職人、お父さんといつも甘い空気をばらまいている。

お兄さんの高町恭也さんはお父さんから剣術を習い、今は『御神真刀流』の中の『小太刀二刀御神流』という名の剣術を受け継いでいるらしい、それに加え成績優秀の大学1年生で彼女持ち。

お姉さんの高町美由希さんはお兄さんから剣術を習っていて、こちらにも勉強は出来る見た目通りのすごい人らしいが、時折抜けているらしい。

こんな感じの話をはなしたのは一通り紹介し終わるところらに向かってニコツと笑いかけてきた。

「えっと…それでね、お話なんだけど」

ああ、そういえば話があるって連れてこられたんだと今更ながらに気づいた。



さつきから二人で同じやり取りを繰り返しているのを見てなのはフアミリーが一斉に笑い出す。

「もう！ 笑わないでよ。私は真面目に……」

怒るなのは見ても相変わらず笑いが堪えられないといったような様子の面々の中、土郎さんだけなんとか復帰し、笑った理由を話す。

「つぶ……、すまんすまん。だけどなのは、それじゃプロポーズしてるみたいだぞ」

「っえ」

ポンツで音が聞こえそうなほど急激に顔を真っ赤にしたなのはカチコチの動きでこちらを見やった後、凄まじいスピードでリビングから出て行った。

なのはが出て行った後、なのはのお兄さんとお姉さんは剣術の稽古があるとかですぐに道場へに出かけて行った。

残ったなのは父と母は座ったまま、俺にも座る様にと目で促す。

席に着くとどこか優しい微笑みを浮かべている二人はしばらくじつところらを見てたかと思うと決心したように口を開いた。

「本当はもつと時間を置いてからの方がいいと思ったんだけどね。なのはが言っていた家族にならないか？ ってのはね。私たちの養子にならないかって事なんだ」

「まだなのはと同じ年頃で身寄りがないみたいだし、記憶も定かじやないのよね？ 私ちよつと男の子が欲しかった所なのよ」

なのはが言っていた事はまさかの告白！？ みたいな衝撃が大きかったが、実際に説明されて俺はより大きな衝撃を受けていた。

両親が既にこの世にいないであろう事は頭では理解できているものの、感情はどうにもならないし、今自分がどこにいるのかも良くわからない時にこの提案である。

正直こんがらがったものの、とりあえず今一番必要である時間が欲しいという結論に行き着いた。

「時間、……時間をくれませんか？」

そついうと何処かほつとしたような顔をする二人、どこか申し訳ない気がする。

「よかつた、実は嫌がられるんじゃないかとドキドキしてたんだ。時間が欲しいならいくらでも待つよ。自分の気持ちに整理をつけた方がいい」

「そうね。私たちはもう受け入れられるけど、あなたにはやっぱり時間が必要よね」

そういつて安心したように再度笑いかけてくる二人。そんな二人を見てみると疑問が降ってわいたように次々頭にあふれ出した。

「どうして…、どうして俺を引き取ろうと思ったんですか？俺は記憶喪失で身寄りがなくて、まだお金のかかる年頃で……。正直孤児院に入れるのが一番だと思っんですけど！」

いつの間にか責めるような口調で思っていたことに気が付いたのはすべてを言い終わった後だった。

困ったように二人が顔を見合わせるのを見てこんなはずじゃなかったのにと後悔が後から後から募っていく。

「勘……かな」

士郎さんがそう小さくつぶやいたかと思うと桃子さんの手を取ってこちらに二人で顔を向けた。

「色々調べて、身寄りがない事も記憶喪失なことも全てわかった後君の寝顔を見て思ったんだよ」

「そうね……私も士郎さんと一緒。あなたの家族になりたいと思っ  
たわ」

俺はその言葉で何か心が満たされるのを感じた。涙が次から次へとあふれ出し、拭っても拭っても止まらない涙に困っていた。



そんな俺を見て二人は椅子から立つとこちらに向かって歩いてきて二人で俺を包むように抱きしめた。

それから俺は生まれて初めてかと思うほどの大きな声でしばらく泣きつづけた。

泣きやんだ後俺はもう一度時間をくれるように頼み、二人は快く承諾してくれた。

それから俺はある程度ぼかしながら記憶喪失ではい事を話した。

両親の死を聞いた時二人は悲しそうな顔を一瞬だけ見せたものまた俺を抱きしめて俺の話す事にずっと耳を傾けていてくれた。

そんな出来事から数日たって、俺は今いる日本という国が大々的に他の次元とあまり交流を持っていないことを知った。

法律には詳しくないのでミッドチルダの事など話してしまっているのかどうかわからなかった為、話すときはこの世界でもっとも自分の外見に近いアメリカという国に置き換えて話しをした。

俺はこの世界の事を大まかに把握出来たことで光の女の子との約束の実現が難しいことを思い知った。

時空航行に必要な技術、資源がこの世界にはほとんどない為である。

養子の話はただでさえ迷惑をかけているのにこれ以上かけられないと思つて遠慮していたが、所詮小学三年生…何ができるわけでもない。

何か進展があるまで、落ち着ける場所がやはり必要だと思ひ俺は名前は変えないことを唯一の条件に、養子になることを受け入れた。受け入れた後すぐに学校へ行かないか？ と土郎さんに提案され、少しばかり困惑したものの、この世界の小学生の教育水準興味があったため承諾した。

正直な話、楽しみでもあった。前の学校では友達と呼べる人は全然いなかった。そこでこちらでそれが作ればいいなと思つたのだ。

そして初登校日の前日俺は可笑しな夢を見た。

ここには存在しないはずの魔法で怪物と戦う少年の夢だ。気にはなつたものの似たような夢なら何度か見たことがある為それほど気にしないで学校に行く準備をし始めた。

料理を作るリズムが聞こえてくる。今日学校でうまくいくといいけどとそんな思いを胸にリビングへと足を向けた。

学校へ行くバスの中で以前であった女の子達に再開した。一通りおはようの挨拶を交わした後、一人一人改めて自己紹介しようという事になった。

「俺はネム・アースベルグだ。この前は世話になったみたいだから、ありがとう」

「気にしないでいいわよ、アタシはアリサ・バニングス。なのはとすずかの親友よ…これからよろしく」

長い金髪の両サイドからちょこんと結んだ髪の毛が可愛らしく飛び出ている。最初思ったように気が少しばかり強いみたいだ。

「えっと、私は月村すずかです。なのはちゃんとは仲良くしてもらってるからネム君も仲良くしてね」

少しウェーブのかかった長い深い紫色の髪を優雅になびかせながら礼儀正しく会釈する姿は育ちの良さを思わせる。

「それにしても今日から同じ学校だなんて、同じクラスになれたらいいけどね」

「なのははいつも一緒だから別のクラスでも変わらないんじゃない？」

少しニヤニヤしながら意地の悪い事を言っているアリサ。なのはを弄るのが生きがいだったりするのだろうか？

「そんなことないもん！　一緒だともっと楽しくなるよ」

「そうだね、一緒だと楽しいと思う」

なのはの意見にすずかが追従することでアリサが止まる。この三人なんだかバランスがかなりいい気がする。

しばらくバスに揺られながら三人と話をしている間に学校についた。まずは職員室に向かわないといけないという事なのでなのは達と別れ、職員室へ向かい若い女の担任教師と顔合わせをした後目的の教室へと向かう。

道中聞いたところによると、どうやらなのはと同じクラスの様だ。

クラスにたどり着き、先生がまず入っていき転校生がいることを告げると手で手招きされる。

緊張して中に入り先生の真横に並んだ後、後ろの黒板に名前を書き、前を向く。

前を向いた時全員が息をのんだのが聞こえたが、これは前の学校の自己紹介の時も同じような感じだったので気にするほどでもない。

「ネム・アースベルグです。これからよろしくお願いします」  
無難な挨拶をしながらお辞儀をする。

「皆の質問を許可する前に驚きの情報があるよー」

そう言った先生に俺が驚いたのは言うまでもない。驚きの情報と言えは魔法とかそんなものしか思い浮かばないからである。

「なんと！ この子は男の子なんだよ！」

その言葉を聞いた瞬間、なのは以外の俺を含め全員の頭にはてなマークが浮かんだ。

そんな全員の反応を見てよしよしとばかりに頷いてこれは本当だからと念押しして質問が開始された後、一番初めに来た質問は本当に男なんですか？ というものだった。

前の学校では生徒はこんなにアクティブじゃなかったし、先生のノリもこんなに良くなかった。

全員で俺が女ネタなんて……、正直ちよつとへこむ。

それから色々な質問が飛び交い疲れ果てた後席に案内された。

先生が気を利かせてくれたのかはわからないが俺の席は窓側で、隣がなのは、前がアリサ、ななめ前がすずかだった。

偶然ならものすごい確率だ。

そんな事を考えているとアリサが後ろに振り返りむすつとした表情とすわった眼でこちらを睨み付けてくる。

「ネムって本当に男なの？」

まさか数少ない親しい知り合いからこんなに傷つけられるとは思わなかった。

「アリサちゃん、そんな事言ったらダメだよー。ネム君落ち込んでるよ」

「すずかちゃんはフォローしてくれているのかどうかよくわからない。」

「ネム君は綺麗な顔してるけどちゃんとした男の子だよ！」

びっくりするほど大きな声でなのはちゃんが強く否定してアリサちゃんとすずかちゃんはかなり驚いていた。

「そ、そうよね。男の子だよね」

「なのはちゃんの言うとおりだよアリサちゃん」

おっかなびっくりで俺が男であることを認める二人を見て自分がしたことが理解できたのかどんどん赤くなっていく顔を机に伏せて黙り込んでしまった。

多少傷つきはしたもののこの学校では楽しめそうだ。なんて予感が胸の内に去来していた。

授業の中で将来の夢について色々考えさせられる話をしていた。その時、夢よりも俺はこれからやるべき事が浮かんでいた。

光の女の子との約束。それが果たせればいいと思った。

そんな思いをネムが抱いていた時、髪につけているデバイスが微かに光ったのには誰も気づかなかった。

## 第2話 新しい家族・友達（後書き）

なのは書くの結構難しいと思うんですよね

どうにかこうにか書いてはいるものの読み返してこれなのはかなー？

何て疑問がしばしば

まあ改善してもどうせいまいちなので今はこのままで

続きはいつ投稿するのは気分次第でv



## 第2話 夢・現実・届く声（前書き）

リリカルなのは中途半端な投稿が続いていて申し訳ないです。

報告でもいいましたが、どうやらネットが切られる様なので慌てて投稿させていただきました。

さてはて、いつごろネット復帰するのかよくわからんのでどうしようもないですが、短期間で済ませたいですね。1か月もかけたくない。

まあ実際どうなるかわかりませんが執筆辞める気はないので気長にお待ちくださいな

それでは今回も微妙に楽しんでいただければと思います。ニヤニヤ

## 第2話 夢・現実・届く声

下校の鐘が鳴り響き、皆が帰り支度をする中で俺は今日の朝からの出来事を思い返していた。

初登校の顔合わせでまさかの女疑惑をかけられた後、否定するもずっとアリサに疑われ続け、最後には胸を触らせるという形で納得させた？ のだが……

その後に話した昔の学校で友達ができなかったという話について、アリサ達の見解ではただ単純にその容姿を見て近づけなかったのではないかという事だった。

正直本当にそんな事で友達が出来ていないならかなりショックだが、俺には生憎皆から近づかれなくなった心当たりもあるのでそんな意見は聞かないし、信じない。

まあ、理由なんていちいち話すほどのことでもないし、反論したらアリサが怖いので「そうかもね」と適当に合図地をうちながら話を流していた。

それから適当に話しながらこの国の授業を受けてみて思ったことが、この国の言葉がとてつもなく奥が深いという事だ。

一つ一つの漢字にはもちろんちゃんと意味が備わっているし、発音だけでも意味が変わってしまう言葉がある。さらには次々に新しい言葉や略語が生まれ、人々はそれに順応していく。

この国ことばに限界はなく、他では考えられないほどの速さで言葉

が増えて言っているのだ。

時には外国の言葉を取り込み、時には新しい言葉を作り出していく。そして授業の中で言葉よりも気になったのが忍びの存在である。

この国に存在していた侍というものは既にミッドチルダや他の国にも似たようなものがある程度浸透しているが、この忍びというものはあまり見たことがない。

まず特殊な歩法や道具を使い、水面を歩いたり、気配を殺して歩いたりと魔法ではない様々な技術を習得している。

今は魔法がある便利な世の中になっている為この技法は浸透しないだろうが、この技術を魔法に反映させることが出来れば魔力を最小限に抑えたまま潜入任務などが行えるようになる。

いや、もしかすると魔法は使えば検知されやすいから、自分が知らないだけで本当の殺し屋というものはこういった技法を使い、魔法を最小限に抑えているのかもしれない。

でもこんなに興味深い話をしているのに学校の生徒が皆また始まったよみたいな顔をしていたのはなぜなんだろうか？

だがしかし、思ったよりもかなり充実した初の学校生活を過ごせたのは今まで過ごしてきた人生の中でもいい思い出だろう。

といった感じでネムがちょうど一日の思い出に浸り終えた時、なのはが声をかけてきた。

「ネム君、一緒に帰ろう」

「うん」

帰る準備をしてから教室のドアの傍で待っているアリサとすずかに合流し、歩きはじめる。

「ネム君、今日はどうだった？」

「すずか、そんなこと聞かなくてもわかるじゃない。私たちが一緒にいるんだから最高に決まってるでしょ」

「もう、アリサちゃんったら決めつけちゃダメでしょ」

アリサの自信はどこから来るのか不思議に思うがその通りなので反論はしない。

「いや、アリサの言うとおり楽しかったよ」

「……………っ！ ほ、ほらね。言ったとおりでしょ」

そういつて若干焦ったように早歩きで進んみはじめるアリサをなのはとすずかが可笑しそうに眺めていた。

「どうかしたのか？」

そんな光景を理解できないといった表情でネムは見やる。

「なんでもないよ、そんなことよりも私たちも早くいこー！」

「そうですね、アリサちゃんだけだと後で怒られちゃいそうですね……」

ふむ、それは良くないなと呟きながらネムも足を速めなのは達と共にアリサを追って行った。

ネム達がアリサに追いついた後何故かまたアリサの中で『ネムは女の子』疑惑が上昇してきていたのにネムは驚いた。

というのも追いついた時にアリサが言っていた言葉が「ネム君はやっぱり女の子！」という言葉だったのだ。

それは自分の気持ちを誤魔化すためにアリサが言ったことなのだが、

ネムはあそこまでしたのにまだ疑われているのかと頂垂れた。

こうなればもう男の尊厳とも言えるべきものを見せる方法しか自分が男だと信じさせることができないような気がしてきたのだが

だからと言ってそんなものを見せれば違う意味で嫌な視線にさらされることだろう。

そんなことを考えているネムの横でなのはとすずかは「まあ、わからないことはないよね」などと追い打ちをかけるものだからネムは半ば絶望した。

証明することができない、女の子三人はどうやら自分を女の子に仕立て上げたらしい。ネムはこういう状況を四面楚歌というのだろうかと思いを若干逸らせ、現実逃避に入り始めた。

そんな風に顔を俯かせながら歩きはじめるネムに気づいたなのは達は慌ててフォローに入りながら帰路を進んでいく。

帰りの途中でアリサとすずかは別れそのまま二人でとぼとぼと歩いていく。

アリサ達がいた時の活気は見る影もなく二人とも無言を貫いていた。けれどなのは話題を探そうとはせずに、静寂を何処か心地よく感じていた。

家には何処か居場所がないように感じていた自分がネム君の横では心地よく感じるのなんだろうか？ と考えて数秒もしないうちに結論へと行き着きなのは一人で顔を赤くし、首を振りながら俯く。

少し落ち着いてから隣を歩くネムをつかがつようにみるとライトブルーの瞳がこちらを覗いていた。

「わわわ！」

なのはは驚き慌てた事で足がもつれ、尻餅をついてしまう。

「大丈夫？」

そう言つてネムの差し出した手を逡巡しながらもなのははしっかりと掴む。

起き上がり、改めてネムを見やる。綺麗に纏められた銀色のポニーテールにか細い体躯、全てを見透かしてしまいそうなほど澄んだ瞳。服装こそ男の子だが見入ってしまうその容姿はアリサも言っていた様にやはり女の子に見えてしまう、となのはは思わざるをえなかった。

けれど今も握っているこの大きな手は男の子と意識せずにはいられないほどしっかりしていて、思わず頼りたくなってしまう。

そこまで考えてなのははずっと手を握っていることに気づき

「あっ、ひゃわわー！！」

慌てて手を振りほどきながら距離を取った。

「えっと、その大丈夫？」

「う、うん！ 大丈夫だよ。早く家に帰ろう・・・私お腹すいちや  
った！」

歩調を速めるのはについていき、どことなく心配そうに顔を向け  
てくるネムを後ろに、なのははまた新たに到来する静寂の中で一人  
心臓をバクバクさせながら家へと帰った。

「はふう……………」

なのは夕食をとった後すぐに部屋へと引き籠りベッドに寝そべりな  
がらごろごろしながら考え込んでいた。

ネム君が来てからというものドキドキしっぱなしな気がする。



今まで男の子にも女の子にもこんなドキドキしたことはない。

「私どうしちゃったんだろ……、やっぱり……」

そこまで言っつて自分の顔が熱くなるのを感じる

「私どうすればいいんだろ……」

そうしてなのはがずっと考え続けて出した答えが「はふう、むりだよー」というつぶやきだった。

火照った体を沈めるかのように布団に抱き着き顔を枕に押し付ける。

そしていつの間にかのはは眠りに落ちていた。

なんだかなのはに避けられている気がするというのが夕食での感想だが、今はそれを気にしている余裕はない。

微弱ではあるがネムは先ほどの夕食時に魔力を感じたのだ。

恐らく誰かが魔法を行使したのだろうが、感じられたのはほんの微かなので大したことはないので行使されたのは恐らく転送魔法あたりだろうか。

元々ナスカの地上絵など魔導師が遊びで書いたと思われる絵をTVで見た時からある程度魔導師達がここにも訪れているだろうことはわかっていた。けれど今も来ているという事だけは確認が取れなかったのだ。

けれどそれも過去の事。先ほどの魔力を知覚して、ここにもやはり魔導師はいるのだと確信が持てた。

今から急いで向かいたい気はするがもう夜も遅い、この家の人たちを心配させるのはさすがに忍びない。

というわけで明日学校の帰りにでも調べることにし、ネムはベッドに転がり少しばかり興奮しながら眠りについた。

二人は夢を見ていた。

まだ年若い、自分たちと同じくらいの傷だらけの男の子が魔法を駆使して化け物と戦う夢である。

戦況は少年が傷を負っているのも構わず突っこんでいき、どんどん化け物を追いこんでいき、あひるボートがある湖の栈橋で少年は魔物を封じようと魔方陣を展開。

少年が優勢のまま物語は終わりに思われたその時、突然少年が膝をつき、魔方陣が消え去った。

恐ろしいほどの魔物の抵抗に傷ついた少年の方が耐えきれなかったのだ。

今度は立場が真逆となり、力尽きかけていた少年が魔物から逃げる形となった。

傷つきながらもどうにか茂みに隠れ、ほっとして少年が倒れたところで夢は終わった。

夢が終わり二人は再び眠りの底へと落ちて行った。

珍しく朝早くから目が覚めたのはは微かに気になる夢の事を記憶の片隅に置きつつ早々と学校へ行く準備を始めることにした。

制服に着替え、いつもより早くリビングに顔を出すとお母さんとお父さんがなのはを迎え、兄と姉を食事の為に呼んできて頼まれた。

別に嫌でもないのでそのまま道場へとおもむき、武道に汗を流すお姉ちゃんとお兄ちゃんに声をかけ、また家へと戻る。

リビングへ戻ってくるとまだネム君が起きてきていないことにはは気づいた。

いつもはなのはより早く起きていたりするほど寝起きはいいはずなのだが、なのはが早起きした今日に限って起きてきていないのだ。

もしかして昨日の事で悩んでたりするのかな？ などと期待半分冗談は分の理由を思い浮かべていると

「なのは、すまないけどネム君も起こしてきてくれないか？」

とお父さんに言われ、お兄ちゃんたちを呼びに行くときには絶対に感じることはない胸の高鳴りを抑えつつ「わかったー」と返事をし、ネムの部屋へと向かう。

ネム君の部屋と書かれたネームプレートがドアにぶら下がり自己主張している。

今更ながらにガチガチに緊張しながら手をドアノブへと伸ばしていく

「へぶうっ」

ゴツンという音と自分の額に衝撃がくるのは同時だった。

「あれ？ なのはどうしたの？」

ぶつけたことに気づいていない様子のネムに「な、なんでもないよ」と慌てて笑いながら首を振り、起こしに来ただけど起きてたんだねと小さくつぶやきながらネムを先導してリビングへと向かう。

おはようという挨拶をみんなで交わし、朝食を済ませた後それぞれの行くべき場所へと向かって出発していく。

「「いつてきまーす！」」

なのはとネムも元気に挨拶をして学校へと向かう。

二人は道中、先日の様に無言だったが様子はまるで別物だった。

ではなぜ黙っているのかと言えば二人とも夢の事を考えていたのである。

僅かではあるが記憶の端に引っかかっているリアルすぎるその夢をなのははネムに相談するべきか、ネムはなのはは巻き込まない方がいいだろうかと悩んでいた。

「ネム君……」

なのはに呼ばれネムが振り向いたと同時にプップーという音が聞こえてきた。

「何？」

「え、いや、その……バス来たよ」

「？ そうだね、乗ろうか」

これでなのはは親切だなと思うだけのネムはもしかしたら鈍感な部類に入るのかもしれない。

バスに乗り込みアリサ、すずかと合流しお喋りしながら学校を目指す。

話している中で今日の授業内容が話題に上がった時ネムはすかさず歴史と国語があるかチェックした。

結果から言えばどちらの授業もあったのだが、歴史の担任が出張のため自習だったのと、国語の事業が急遽開かれた全体集会でつぶれてしまった。

落ち込みつつも壇上で生活指導の先生が喋る内容へとネムは耳を傾けた。どうやら近くで小規模な事故が起こったらしく、十分に気を付けようというありがたいお言葉だった。

もしかしたら夢の事かな？　とも思ったが好きな授業が出来なかったことでネムの頭はどこにぶつければいいかもわからない怒りでいっぱいになった。

そんなネムをなのは達が懸命に宥め、明日もあるよと説得したものの、ネムが怒りがやっと収まったのは放課後になってからだだった。

「なのは達にあたってしまって悪かった……………」

「別にかまわないけど、授業がそんなに好きだなんて、ネムって変わってるわよね」

そう言っただけを歩くアリサがこちらを見ながら暗い雰囲気消す為に話題を変えてきた。

「本当だよね。勉強なんて楽しくないのに……………すごいなあ…。私も

アリサちゃんやすずかちゃんやネム君みたいになりたいな」

しかしアリサの予想と反して今度はなのはがネガティブになってしまったのは誰のせいにもできないだろう。

けれど黙ってそんな事を聞き逃すアリサではない、アリサはいつもの勝気な態度とは裏腹に心配りのできる子なのである。

「そんなこと言ってなのは私より数学の成績いいじゃない」

「アリサちゃんの言うとおりですよ。なのはちゃんにも私たちにはないいい所がありますよ」

すずかもアリサに追従する形でなのはを励ます。

「うー、でも……………」

必死に励ますアリサ達の努力もなかなか実を結ばない、なのはは昔に暗い過去を背負っている為一度ネガティブになるとなかなか直らないのである。

「あ~~~~っ、うっさい！ うっさい！ うるっさ~~~~っ！ いっ！」

いい加減飽き飽きしていたアリサが大声を出してなのはを叱りつける。

と言ってもなのはもこれできてなかなか頑固なため、二人でしばらくの間口喧嘩し続けることになった。

そんな二人を見ながらすずかが「もう大丈夫ですね」とばかりに微



笑んでいた風景をネムは面白そうに眺めていた。

しばらくするといつの間にかアリサとなのはの喧嘩は収まっており、いつも通りの仲良し状態になっていた。

そして「初めてネム君とあった場所へ行かない？」という話の流れになり、公園へと向かう事になった。

公園を歩く中、初めて見た時のネムはこーだった、あーだったと女の子三人が喧しく話しているのにネムは参加できずにいた。

始めは気にしていたネムだが、公園にある湖があるところまで来るとそんな思いは吹き飛んだ。

何故かと言えば目の前の湖の惨状があまりにもひどい為である。

あひるボートの貸し出し場所と思われる古びた小屋は無残にも半壊し、桟橋はほとんどが崩れて使い物にならなくなって、その残骸と思われる者が湖の表面に散らばっていた。

そしてその惨状を囲むようにKEEP OUTと書かれた黄色いラインがそこいらにあり、管理人さんと思われる人と警察の人が近くで話し合っていた。

ネムに遅れる形で気づいた三人もあまりの現状にしばらくの間言葉を失っていた。

「いったいどうしたんでしょう？」

さすがが疑問を口にするのがアリサがすぐに行動を起こした。

「お巡りさん、いったいこれはどうしたんですか？」

そうしてアリサが効いている時になのはは女の子二人とは違った想いを胸に抱いていた。

(これってもしかして今日出てきた夢の……………)

なのはがそう思った瞬間だった。

『助けて……………』

か細く聞こえる助けの声になのはすぐにあたりを見回した。けれど周りに特に助けを求めている人はいなかったどころか、その声を気にしている人もいないように思う。

(気のせい……………?)

『誰か…、助けてっ……………』

なのはの思いを否定するように即座に聞こえてくる声。

それが勘なのか、別の要素でなのかは分からなかったが、なのはは助けを求めている者がどこにいるのかが何故か分かった。

そしてその場所へ至る道へと視線を向けると既に走り出していたネムの姿が目の前にあった。

(まさかネム君も聞こえてるの?)

ネムの素早い動きに疑問を覚えながらもものはも慌ててネムの後を追っていく。

そしてそんなネムとなのはの動きに気づいたはずか、アリサも二人の後を追いかけて行った。

しばらく公園で整備されていない道なき道を進んでいくと少しばかり開けた場所に出た。

そこで四人が見たものは傷つき、倒れているフェレットだった。

「そっしょっ……?」

それがフレットを見つけた四人の共通の問いだったのは言うまでもないだろう……。

## 第2話 夢・現実・届く声（後書き）

やっとフェレット拾いました！

ええ、このフェレット拾う為に結構苦労しましたがとも、4人のPTでなのはかネムが混ざってるのが絶対条件で湖まで行かないいけませんからね。

超限定的なイベントで私も大変でした。でもこのフェレット拾わないとストーリーが進まないの

とかどこぞのゲーム風に言ってみました、ただの暇つぶしで深い意味はありません。

今後とも駄目な作者を生暖かい目でじっとりと見守ってください。

あ、やっぱり気持ち悪いので遠慮しておきます。

普通に見守ってくれるのが一番です、はい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1636x/>

---

魔法少女リリカルなのは～銀髪の少年～

2011年10月30日22時17分発行